本書は人為的CO2温暖化説を否定し、地球温暖化（気候変動）は心配いらないと伝えるものである。

第1章『嫌われ者の身上書』では、森林破壊や絶滅危惧種、環境汚染、温暖化などのウソを暴いてきた著者マーク・モラノ氏が人為的温暖化の懐疑派となった経緯について述べられている。

第2章『いつか来た道』では、1970年代の地球寒冷化騒ぎを例にいつの世も「いまの気象」を異常と見る人が多いと指摘している。どの気象記録も正常範囲であり、異常気象を煽る昨今の研究者を批判している。

第3章『虚構の「合意」』では、全世界の研究者の97％が人為的温暖化説に合意しているという話はウソであると説明している。この97％という数字は、偏見や分類ミス、雑なデータ、分類基準が一貫していないところなど欠陥だらけでありでっち上げだと述べている。

第4章『尾が犬を振る？』では、地球の気候や気温は何百もの要因で変わるものであり、CO2濃度が今の2倍や3倍になったところで、地球の気候や気温にほとんど影響はないと述べられている。大気に増えるCO2が温暖化を進めるのではなく、まず気温が変わり、気温変動に応じてCO2濃度が変わると説明している。

第5章『脳内の危機』では、メディアや脅威派が予言してきた極地の氷が消える話や海面上昇が加速している話は当たっていないことを指摘している。南極の氷は増え続けており、海面上昇のペースは過去100年以上ほぼ一定で、CO2排出が増えてから加速した気配はないと述べている。

第6章『折れたスティック』では、マイケル・マン教授が1998年に発表した、今の気温が過去1000年で一番高いことを示す「ホッケースティックグラフ」を気候史の改ざん・捏造によってできたものだと指摘している。ローマ時代や中世は今よりも暖かかったと説明している。

第7・8章では、地球の気温は1998年頃から20年以上ほぼ横ばいのまま推移しており、「記録的高温」といっても年ごとの気温差は0.01℃台でしかないと述べている。しかし、温暖化脅威派は実測データよりも予測データの結果を宣伝し、気温の上昇を過大に見積もっていると批判している。

第9章『消えゆく「合意」』では、温暖化脅威派の高飛車な態度を見て、懐疑派に転向した科学者が多いと説明している。懐疑派に転向した地球物理学者兼政治家であるクロード・アレーグル氏は、エコのかけ声が一部の人間を大儲けさせ、アル・ゴアのノーベル平和賞は政治的喜劇でしかないと述べている。

第10章『腐敗の証明：クライメートゲート事件』では、IPCCが温暖化説の教義を死守すべく、データの小細工や論文審査への干渉、懐疑派のブラックリスト化などを行っていたと指摘している。IPCCは化学組織ではなく国際政治の道具だと説明している。

第11・12章では、メディアと脅威派が言う温暖化のせいで洪水や干ばつ、山火事、ハリケーン、竜巻などの自然災害が増えるといった理論は間違いであると指摘している。実際にはどれも減っており、科学的証拠は一切ないと述べられている。

第13・14章では、温暖化が事実であってもなくても進める政策は同じであると語る政治家や学者が多く、温暖化対策の目的は森林破壊やオゾンホールなど「具体的な環境の話」ではなく、富の再分配や世界の一元管理、グローバル統治であると説明している。

第15章『乗り遅れるな！』では、温暖化脅威派の研究者は懐疑派の3500倍も研究費を手に入れていると述べられている。その上で、金に縛られる集団思考が気候科学を腐らせており、正常化には研究費を大幅に減らすべきだと指摘している。

第16章『偽善者ばかり』では、元副大統領アル・ゴアやレオナルド・ディカプリオなどハリウッドのセレブを例に、温暖化脅威派は破局的な状況を避けるため省エネに励もうなどと口にするが、その当人は豪勢な暮らしをしていると批判している。

第17章『子どもをダシに』では、幼稚園児から高校生までの若者は温暖化脅威論の布教にぴったりのターゲットであり、子どもを使って温暖化ホラー話を広げていると説明している。グリーンピースの共同設立者パトリック・ムーア博士は「子どもを使う宣伝工作は許しがたい」と述べている。

第18・19章では、温暖化脅威派と活動家が押し付けるCO2削減や、化石資源の利用縮小は貧困国の経済成長を阻むと指摘している。今の先進国は、化石資源を活用したからこそ貧困から抜け出せたため、化石資源を使わせないのは人種差別であると説明している。

第20章『救いの光』では、トランプが大統領選に勝利したことで、破局的温暖化という迷信に頼るベクトルが健全なエネルギー政策に戻ったと述べられている。もし人類が温暖化の危機に直面しているなら、化石資源の利用を禁止・縮小するのではなく、効率的で安価な新技術を見つけるべきだとまとめている。

人為的CO2温暖化説に否定的な立場の意見を知りたいと思い本書を選んだ。人為的CO2温暖化説に科学的な根拠は全くなく、科学データの小細工や科学者の合意の捏造によって作られた物語であるということに驚いた。もし著者が述べていることがすべて正しいのなら、温暖化防止のためにやっていることは無意味であり、金の無駄だと感じた。

マーク・モラノ　著　日本評論社　2019年6月25日発行